

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370450

研究課題名(和文)日本語におけるモーダルな不定表現の意味論と統語論

研究課題名(英文)The semantics and syntax of modal indefinites in Japanese

研究代表者

金子 真 (Kaneko, Makoto)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：00362947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では次の2点を主張した。モーダルな不定表現に対しては、先行研究では統一的な分析が提案されることが多かったが、次の3つのタイプを区別すべきである：A) 名詞句の意味に、それが表す代替集合が2つ以上の要素を含むという制約を課すタイプ；B) 名詞句と同格的関係を持ち、名詞句自体の意味には影響を与えないタイプ；C) スルーシングを受けた挿入句的疑問節に相当するタイプ。日本語のモーダルな不定表現の肯定極性的ふるまいは、不定表現自体の意味的要因だけでなく、否定辞ナイの統語的位置、対照主題を伴い部分否定解釈を受けることの困難さ、日本語の従属節の意味的特徴など、外的要因にもよる。

研究成果の概要(英文)：This study advances the following two hypotheses about modal indefinites, like Japanese "WH-ka". 1) Although most of previous analyses have proposed some unifying analysis to them, modal indefinites in various languages should be classified among three types: Type A which requires that the alternative set provided by the NP includes at least two members having different values in different worlds; Type B which boils down to a set of alternative entities, to which the following NP is semantically adjoined; Type C which is a sluiced parenthetical interrogative clause. 2) The positive polarity properties of "WH-ka" stem from factors not necessarily coming from its lexical semantics: morpho-syntactic properties of negative -nai; pragmatically motivated scope-inverting effects of the contrastive topic ("??I didn't see SOMEON" vs "I didn't see ALL"; semantic properties of some complements (ex. complements of speech act verbs) which are specified to denote an utterance in davidsonian terms.

研究分野：言語学

キーワード：modal indefinites modal variation appositive parenthetical question implicature positive polarity contrastive topic davidsonian 'utterance'

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象である「モーダルな不定表現」とは、確言文では話者が名詞句の指示対象を同定できないという意味を表すものであり、下記の例のWH-カ、WHダカがこれに当たる。

- [1]a. 臍臓に何か影があるがよくわからない (BCCWJ, LB14_00042/31720)
 b. 安く買える理由が何か存在する (BCCWJ, OC06_0060)
 c. 彼女、誰だか人相のわるい男と、話しています (BCCWJ, LBc9_00087)

他言語の例としては英語の *some* 単数、*some NP or other*、仏語の *quelque*、独語の *irgendein*、スペイン語の *algún NP*、イタリア語の *un qualche* などが挙げられる。こうした表現について、本研究では特に次の3点に注目した。

(1) モーダルな不定表現は特に否定文中で異なる振る舞いを示す。例えば同一節中に否定要素がある場合、*irgendein* は否定極性を示すが、*some* は肯定極性を示す。先行研究中には、肯定極性を不定表現に内在する語彙的特性に帰すものが多い。例えば Szabolcsi (2004)は「2重の否定特性」、Giannakidou (2011)は「特定性」、Spector (2014)は「尺度含意 not all の文法化」を肯定極性の起源としている。日本語の上記のようなWHカという形をとる不定表現も、肯定極性を示すことが知られているが、先行研究の分析が当てはまるかについてはまだ十分検討されていない。

(2) モーダルな不定表現の確言文での非同定の意味について、①語用論的に生じる会話の含意 (Alonso-Ovalle & Menéndez-Benito 2010)、②キャンセルできない慣習的含意 (Aloni & Port 2015)、という2つの競合する分析が提案されている。そして日本語のWHカについても、この2つの分析が提案されている、まだ議論が続いている状況である。

(3) 様々な不定表現の対照研究は Haspelmath (1997)によって始められ、個々の表現はどれだけの範囲の意味を表すことができるのか、調査が行われてきた。Aguilar-Guevara et al. (2010)らはその研究を発展させ、欧米語のいくつかの不定表現について、各意味の用例数の割合に関するコーパス調査を行い、そうした調査をもとにそれぞれの表現についてより適切な分析を探っている。一方日本語のWHカ、WHダカについては、まだこうしたコーパス調査は行われていない。

2. 研究の目的

本研究はこうした研究状況を踏まえ、対照言語学的観点も交えつつ、次の点を明らかにすることを目的とした：(1)日本語のWHカは否定文において英語の *some* と異なるふるまいを示すか、もし示すならそれはなぜか；(2) [1a,b,c]のようなWH(ダ)カに対してはどのよ

うな分析が適切か、さらにそもそも多様なモーダルな不定表現を統一的に説明すべきか；(3) [1a,b,c]のようなWH(ダ)カはどれだけの範囲の意味を表すことができるか、また個々の用法の割合はどのくらいか。

3. 研究の方法

これらの目的を達成するため、次のような方法で研究を行った。

(1) 英語の *some* 等と比較しつつ、WHカが否定文の従属節中でどのような振る舞いを示すのか、従属節をト補文節とその他に區別しつつ調査する。

(2) 非同定の「会話の含意」分析と、「関与的な同定の欠如」分析のそれぞれの論拠として提案されている3つのテストを、WHカ、WHダカを含め、様々な言語の不定表現に適用し、それぞれのふるまいに違いがないか調査する。

(3) Aguilar-Guevara et al. (2010)と同様の調査をWH(ダ)カに対して実施し、この表現を世界の様々な言語の多様なモーダルな不定表現の中に位置づける。

4. 研究成果

上記の3点について次の成果が得られた。

(1) すでに先行研究において、否定文中のWHカは①-③のような *some* との共通点を示すことが指摘されている。これに加えて本研究では、④、⑤のような相違点も示すことを明らかにした。

①同一節中の否定より広いスコープをとる。

- [2]a. John didn't call **someone**. (Szabolcsi 2004: 414) [*not > some]
 b. ブタさんはナニカ食べなかった。(Goro & Akiba 2004: 107) [*ない > ナニカ]

②従属節にあるとき主節の否定より狭いスコープをとる。

- [3]a. I don't think that John called **someone**. (Szabolcsi 2004: 415) [√not > some]
 b. ジョンは[ブタさんがナニカ食べた]とは言わなかった。[√ない > ナニカ]

③ *some* は、同一節中に否定があっても、節の外に下方伴立オペレーターがあれば、同一節内の否定のスコープ内で解釈されうる。こうした現象は「救済効果」と呼ばれる。

- [4] I don't think that John didn't call **someone**. (Szabolcsi 2004: 417)
 [√not^{external} > nor^{clause-mate} > some]
 =I don't think that John didn't call **anyone**.

WHカも、条件節前件や、関係節内では救済効果を示す。

- [5]a. ダレカ来なかったら、ジョンを呼ばなければならぬ。(Hasegawa 1991: 272)

- の例を改変)=「ダレモ来なかったら...」
 b. 太郎はナニカを買わない学生を見なかった。「=ナニモ買わない学生を...」

④ *some* は、同一節中に否定があっても、否定との間に介在する別の量化表現があれば、同一節内の否定のスコープ内で解釈される。こうした現象は、「介入効果」と呼ばれる。一方 WH カは介入効果を示さない。

[6] John doesn't always call someone. (Szabolcsi 2004: 415) [$\sqrt{\text{not}}^{\text{clause-mate}} > \text{always} > \text{some}$]

[7] 花子は毎日ナニカを食べない。[*ない > 毎日 > ナニカ]

⑤ *some* と異なり、WH カは、発言・思考動詞のト補文節では救済効果を示さない。

[8] I don't think that John didn't call someone. (=4a) [$\sqrt{\text{not}}^{\text{external}} > \text{not}^{\text{clause-mate}} > \text{some}$]

[9]a. K 先生はいつもぼんやりしている。しかしさすがの K 先生でも、[試験の時にカンニングしていた学生を、ダレカ見つけられなかった]とは思わない。??少なくとも、(どんくさい) 太郎は見つけたと思うよ。

[??ない external > ない clause-mate > ダレカ]

b. K 先生はいつも注意深い。そうした K 先生だけに、[試験の時にカンニングしていた学生を、ダレカ見つけられなかった]とは思わない。みんな見つけたと思うよ。

[√ない external > ダレカ > ない clause-mate]

そしてこうした現象を説明するには次の3つの外的要因を考慮する必要があると論じた。

① 日本語の否定辞ナイは動詞の接尾辞として現れ、そのスコープは基本的に直前の動詞にしか及ばない (cf. Kuno 1980)

② 不定表現は否定文中でより強い尺度含意を持たないため対照主題と共起しにくく、否定の焦点となりにくい。この点で対照主題と共起して。否定文中で否定の焦点となりえる全称量化表現と異なる (cf. Hara 2008)

[10]a. 太郎は全ては読まなかった。[√ない > 全て]

b. 太郎はナニカは読まなかった。[*ない > ナニカ]

② 日本語は複数の補文標識(ノ、コト、ト等)を備え、それぞれ補文に異なる意味のタイプを指定する。ト補文節は、英語の *that* 補文節と異なり、「命題」ではなく「他者の引用のパラフレーズ」を表し、真理条件的に主文事態とは独立である (cf. Saito 2012)。

そしてこうした調査結果をもとに、WH カの肯定極性は、先行研究が主張するように特別な語彙特性により生じるというよりは、外部の要因が組み合わされて生じる派生的現象と考える用法が適切である、と論じた。

(2) 先行研究で指摘されてきた以下の①-③のテストを、各言語のモーダルな不定表現に適用すると、A~Cの3つのタイプに分かれた。

タイプ A: (1b)のような格付き名詞句に後続する WH カ、*some NP or other*、*algún* 等

タイプ B: (1a)のような名詞句に先行する WH カ、*some*+単数、*irgendein* 等

タイプ C: (1c)のような WH ダカ、英語の挿入句的 *I don't know WH*

① 「代替集合に要素が1つだけの名詞句との共起可能性」テスト

Alonso-Ovalle & Menéndez-Benito (2010)は、*algún* は「名詞句の表す個体の集合が2つ以上の要素を含むことを前提としている」と主張している。この分析によると、例えば *some student or other* は *student¹ or student²* と書き換えられる。そしてその論拠として、[11a]のように名詞句が特定解釈を受け、最上級表現を伴い代替集合に1つの要素しか存在しない場合、*algún* は容認されないことを指摘している。一方 Sudo (2010)は、[11b]が示すように名詞句に先行する WH カは同様の文脈で容認されることを指摘している。

[11]a. #Juan compró algún libro que resultó ser el más caro de la librería (Alonso-Ovalle & Menéndez-Benito 2010) [A]

'Juan bought ALGÚN book that happened to be the most expensive in the bookstore.

b. ジョンは、ドレカその本屋で一番高い本を買った。(Sudo 2010, (33b)) [B]

インフォーマントによると、次例が示すように同様の文脈において、タイプ A は容認されないが、タイプ B、C は容認されるという結果が得られた。

[12] ??ジョンは、その本屋で一番高い本をドレカ買った。[A]

[13]a. Hans bought some book which then turned out to be the most expensive in the bookstore. [B]

b. Hans kaufte irgendein Buch, das sich dann als das teuerste im Buchladen herausstellte. [B]

[14]a. ジョンは、ドレダカその本屋で一番高い本を買った。[C]

b. John bought a book – I don't know which one – that was the most expensive in the bookstore. [C]

名詞句が特定解釈の「婚約者」の場合も、代替集合に1つの要素しか存在しないため、同様の相違が見られた。

[15]a. クリスチンには、郷里にダレカ婚約者がいるんだよ。(モンゴメリ, 中村佐喜子訳 2013 『アンの婚約』) [B]

b. Christine hat irgendeinen Verlobten in ihrer Heimatstadt. [B]

[16]a. ??クリスチンには、郷里に婚約者がダレ

- カいるんだよ。[A]
 b. ??Christine has **some** fiancé **or other** in her hometown.[A]
 c. ??Christine tiene **algún** pomedido en su ciudad natal. [A]
 [17] クリスチンは**ダレダカ**婚約者がいるんだよ。[C]

②「指差し・名前による同定」テスト

Aloni & Port (2015)は「モーダルな不定表現は、慣習的含意として文脈上必要とされる仕方での同定が欠如していることを示す」と主張し、同定の仕方が各不定表現の容認度に関与することの論拠として、指示対象が指差しはできるが名前では同定できない場合、*algún* の容認度が低いのに対し *some* と *irgendein* は問題なく容認されると指摘している(ex. [18a-c])。Sudo (2010)は、[18d]が示すように同じ文脈で名詞句に先行する WH カは容認されることを指摘している。[18e]は、同じ文脈で WH ダカも容認されることを示す。[19a]は指示対象が指差しを受ける実例であるが、WH カを[19b]のように名詞句に後続させると容認度が落ちる。

- [18]a. Look! **Some** professor is dancing lambada on the table. (Aloni & Port 2015:131) [B]
 b. Guck mal! **Irgendein** Professor tanzt Lambada auf dem Tisch! (ibid.) [B]
 c. ??Mira! **Algún** professor está bailando lambada encima de la mesa! (ibid.) [A]
 d. 見て! **ダレカ**教授が、机の上で踊っているよ! (Sudo 2010) [B]
 e. 見て! **ダレダカ**教授が、机の上で踊っているよ! [C]
 [19]a. あ、**誰か**あそこで下を覗いている人がいます。あの人はいったい何をやっているのかというと[...] [B]

<https://plaza.rakuten.co.jp/petpet55/diary/201204130000/>

- b. ??あ、あそこで下を覗いている人が**誰か**います。あの人はいったい何をやっているのかというと[...] [??A]

Slade (2014)はまた、指示対象が特定解釈を受け名前により同定される場合、[20a]のように *some* は容認されるのに対し、*some NP or other* は容認されないと指摘している。[20b,c]が示すように、同様の文脈で、名詞句に先行する WH カは容認されるのに対し、後続する WH カの容認度は低い。さらにインフォーマントによると、[20d,e]が示すように、同様の文脈で *irgendein* は容認されるが *algún* の容認度は低いようであった。

- [20]a. **Some** guy named Chris has something to say. (Slade 2014: 100) [B]
 b. **ドナタカ**スミスという方が、お話ししたいそうです。[B]
 c. ??スミスという方が**ドナタカ**、お話ししたいそうです。 [A]
 d. ??**Algún** tipo llamado Smith quiere hablar

con usted. ‘**ALGÚN** guy, named Smith, wants to talk with you.’ [A]

- e. **Irgendein** Mann - Smith oder so - hat angerufen. ‘**IRGENDEIN** man, Smith or the like, called. [B]

③「非同定のキャンセル可能性」テスト

Alonso-Ovalle & Shimoyama (2014)は、名詞句に先行する WH カと *algún* は、他の量化詞より狭いスコープを取る場合、非同定の意味がキャンセルされると指摘し(ex. [21a,b])、この意味は慣習的含意ではなく会話の含意と考えるべきであると主張している。タイプ A、B は一般に同じふるまいを示す(ex.[22a,b])。一方[23a,b]が示すように、タイプ C は同一文中の他の量化詞に対し必ず広いスコープを取り、非同定の意味がキャンセルされることはない。

- [21]a. どの教授も**ダレカ**学生と踊った:A 教授は学生 a と B 教授は学生 b と踊った。(Alonso-Ovalle & Shimoyama) [B]
 b. Todos los profesores están bailando con **algún** estudiante. ‘All the professors are dancing with **ALGUN** girl student’(ibid.) [A]
 [22]a. Every boy wants to kiss **some** gir **or other**. (Slade 2015: 91) [A]
 b. Jeder Junge tanzt mit **irgendeinem** Mädchen. ‘Every boy is dancing with **IRGENDEIN** girl.’ [B]
 [23]a. どの教授も**ダレダカ**学生と踊った。#A 教授は学生 a と、B 先生は学生 b と踊った。 [C]
 b. Every boy is dancing with a girl -- **I don’t know with whom** -- #John is dancing with Mary; Paul, with Yoko. [C]

以上の結果は次のようにまとめられる。

	唯一的 NP	指差し/名前同定	非同定キャンセル
A	??	??	√
B	√	√	√
C	√	√	??

そしてこうした違いを説明するために、*Inquisitive Semantics* の考え方に従い、不定表現を含む確言文は、存在量化 (cf. 「ダレカ来た」に関しては、「来た人はゼロではない」) を表すだけでなく、代替集合の意味を保ちえると想定しつつ、以下の分析を提案した。

タイプ A : 意味論的には「名詞句が表す個体の集合の中から文脈上関与的な下位集合を選択する関数」として働き、その下位集合に「2 つ以上の要素を含む」という制約を課す。下位集合に要素が 1 つしかない名詞句 (ex. 「店で一番高い本」) とは共起しない。また、指示対象が指差しや名前により同定される場合にも容認されない。

タイプ B : 名詞句と同格的関係を持ち、要素の並列で書き換えられる。タイプ A と異なる

り名詞句自体に制約を課すことはないため、代替集合に要素が一つしかない名詞句とも共起し、指示対象が指差しや名前が同定されている場合も容認可能。非同定の意味は、要素の並列の場合と同様、会話の含意でありキャンセル可能。

タイプ C：スルーシングを受けた挿入句的疑問節に相当する。非同定の意味は、疑問と密接に結び付いた慣習的含意でありキャンセルできない。

(3) Aguilar-Guevara et al. (2010)と同様の調査を『日本語書き言葉均衡コーパス中納言』(BCCWJ)を用いて、日本語の3つのタイプの不定表現に対して実施した。Aタイプについては「NPが/をダレカ」7例、「NPが/をナニカ」70例、計77例、Bタイプについては「ダレカ NPが/を/に/φ」106例、「ナニカ NPが」435例、計543例について調査し、次の結果を得た。用例数にはかなりの違いが見られたが、どちらも70%程度は非特定用法であった。SU (Specific Unknown)は特定・非同定を表す。

	SV	SU	IR	Q	CA	AM
A	0	23 (29.9%)	22 (28.6%)	25 (32.5%)	6 (7.8%)	1 (1.3%)
B	20 (3.7%)	166 (30.6%)	111 (20.4%)	125 (23%)	112 (20.6%)	9 (1.7%)

表中でSVとは Specific Variable の略であり、WHカが同一文中の量化詞より狭いスコープをとり、指示対象が変化する例を指す。この用法は2.3節で扱った非同定の意味がキャンセルされる場合に当たる。その他の用法もあわせ例を下に挙げる。

- (i) Specific Variable [SV]：家には、たいいてい何か問題があった。天井がひどく低い家もあったし、全然陽の射し込まない家[...] (BCCWJ, LBk9_00085/1750)
- (ii) Irrealis [IR]：「誰か人が来るかもしれませんね」と (BCCWJ, LBb9_00129/31710)
- (iii) Question [Q]：おい、村松よ。この害者一人か。それとも誰か付き添いが居るのか。(BCCWJ, LBi9_00162 / 12020)
- (iv) Conditional Antecedent [CA] 及びその他の単調減少領域 $p \Rightarrow q$ かつ Op ($q \Rightarrow p$) が成立する：登るときも基本的にはみんな一緒に登ります。もし、誰かひとりが遅れ始めたら他のみんなは待ってあげます。(BCCWJ, LBn7_00059/15620)
- (v) Anti-morphic [AM] Op ($p \vee q$) \Rightarrow Op(p) \wedge Op(q) かつ Op ($p \wedge q$) \Rightarrow Op(p) \vee Op(q) が成立する：手続きをしければなりません、これをする事によって、何か弊害が起ることはありません。(BCCWJ, LBr3_00088)

WHダカについては、「誰だか」「何だか」

をBCCWJで検索したところ、明確に名詞句にかかっていると考えられる例は「誰だか」については2例しか見つからなかった。「何だか」については270件ヒットしたが[24a]のように名詞句にかかっていると考えられる例は7例だけで、その他は[24b]のように名詞句+述語全体 (ex. 「気分が悪い」)にかかっていると考えられる例がほとんどであった。この7例は全て確言文であり、特定・非同定解釈(SU)を受けるものであった。

- [24]a. 此間も櫓取の浜で、何だか寄寄があったと云ふぢやないか(BCCWJ, LBf9_00043)
- b. 何だか気分が悪いなと思う途端に (BCCWJ, LBa9_00077)

ところでKinuhata & Whitman (2011:94-95)はWHカの意味の通時的変化を調査し、WHカという連鎖は現代日本語では不定解釈を受けるが、19世紀初頭以前は専ら疑問解釈を受けていたことを指摘している。さらにその論拠として、疑問節と分析されるWHカは、疑問の対象となる要素は特定されてなくてはならないため、名詞句の特定解釈が可能である確言文でのみ用いられ、非特定解釈を喚起する疑問文、命令文などでは使用されなかったことを指摘している。この指摘を援用すると、上記のようにWHダカは専ら確言文で見られ特定非同定解釈を受けることは、このタイプが挿入句的疑問節であるという本研究の分析を裏付けるものと言える。

さらにAタイプとBタイプの違いは、共起する名詞句のタイプにみられた。すなわちタイプBに比べてタイプAでは、NPが「人」「こと/事」「理由」など一般的な意味を表すものが多いという傾向がみられた。例えば「NPが/をナニカ」でヒットしたものうち、モーダルな不定表現に該当すると判断した70例のうち34例(48.6%)において、NPは「こと/事」であった。一方、「ナニカ NPが/を」については大量にヒットがあったため、収集例の一部508例についてのみ調査した。その際、ナニカの後続文脈を選択し、その範囲で「こと/事」の検索をかけ、ヒットした各例について「こと/事」がナニカのホスト名詞と考えられるかを調べた。するとNPが「こと/事」であるものは、17例(3.4%)しかみられなかった。このようにBタイプでは一般的な意味を表すNPを伴うことが非常に少ないことは、上記の「名詞句に先行するWHカは、名詞句の同格表現であり、名詞句だけで独立に指示対象を確立できる」という仮説を支持するものと考えられる。

ただし、収集した全ての例の分析はまだ行っていない。またWHダカについては名詞句より大きな連鎖にかかる用法 (ex. (24)) の例が、モーダルな不定表現用法の例より格段に多く見られたが、2つの用法の関係については明確にできていない。さらにalgúnをAタイプ、someとirgendeinをBタイプに分類したが、この区分を裏付ける意味的論拠は得て

いるが、形態・統語的論拠は得られていない。こうした点については、今後の研究の課題としたい。

<引用文献>

- Aguilar-Guevara A. et al. 2010. *Indefinites as fossils* <http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/summary?doi=10.1.1.1.86.9553>
- Aloni, M. & A. Port. 2014. Modal inferences in marked indefinites: the case of German *irgend*-indefinites. In A. Aguilar-Guevara et al. (eds) *Weak Referentiality*. John Benjamins: 17-44.
- Aloni, M. & A. Port. 2015. Epistemic indefinites and methods of identifications. In L. Alonso-Ovalle & P. Menendez-Benito (eds) *Epistemic Indefinite*. Oxford Univ. Press.
- Alonso-Ovalle, L. & P. Menéndez Benito 2010. Modal Indefinites. *Natural Language Semantics* 18: 1-31.
- Alonso-Ovalle, L & Shimoyama, J. 2014. Expressing Ignorance in the nominal domain: Japanese *WH-ka*. *WCCFL* 31: 11-20.
- 江口正 1998「日本語の間接疑問文の文法的位置づけについて：不定的同格要素として」『九大言語学研究室報告』19.5-24.
- Goro, T. & S. Akiba. 2004. The Acquisition of Disjunction and Positive Polarity in Japanese. *WCCFL* 22: 101-114.
- Hara, Y. 2008. Scope Inversion in Japanese. *Japanese / Korean Linguistics* 13: 245-256.
- Hasegawa, N. 1991. Affirmative Polarity Items and Negation in Japanese. In Georgopoulos et al, (eds.) *Interdisciplinary Approaches to Language*: 271-285.
- Haspelmath, M. 1997. *Indefinite Pronouns*. Clarendon.
- Kinuhata, T. & J. Whitman 2011. Genesis of Indefinite Pronouns in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 18.
- Kluck, M. 2011. *Sentence amalgamation*. Doctoral Dissertation, University of Groningen.
- Kuno, S. 1980. The scope of the question and negation in some verb-final languages. *CLS* 16: 155-169
- Saito, M. 2012. Sentence types and the Japanese right periphery. In Grewendorf et.al (eds.), *Discourse and grammar*: 147-175.
- Slade, 2015. A short history of English epistemic indefinites. In Alonso-Ovalle & Menendez-Benito (eds) *Epistemic Indefinites*: 100-113.
- Sudo, 2010. *Wh-ka* indefinites in Japanese. *Workshop on Epistemic Indefinites* at University of Göttingen.
- Spector, B. 2014. Global Positive Polarity Items and Obligatory Exhaustivity. *Syntax & Semantics* 7.
- Szabolcsi, A. 2004. Positive polarity negative polarity. *Natural Language & Linguistic Theory* 22. 409-452.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Kaneko, Makoto « Distribution sur les membres interdépendants – une analyse de la coordination nue en français ». In F. Neveu, et al. (éds.) *Actes du 5^{ème} Congrès Mondial de*

Linguistique Française, 2016, DOI : <http://dx.doi.org/10.1051/shsconf/20162712010>

[学会発表] (計 5 件)

- ① Kaneko, Makoto « Les déterminants et l'uniformité des référents », *Représentations du sens linguistique* VII, 2017年10月25-27日、Université de Sherbrooke, ポスター発表 (採択)
- ② 金子真「3つのタイプの認識的不定表現」日本言語学会第154回大会ポスター発表、2017年6月24-25日、首都大学東京 (採択)
- ③ Kaneko, Makoto « Different syntax and common semantics of referentially vague indefinites », 2016年11月3-4日、*Rencontres d'Automne de Linguistique formelle (RALFe 2016)*、パリ CNRS.
- ④ Kaneko, Makoto « Diversity of the source of positive polarity – with special reference to Japanese WH-ka », workshop *Varieties of positive polarity items* (The 37th Annual Meeting of the *Deutsche Gesellschaft für Sprachwissenschaft (DGfS)*、2015年3月4-6日、ライブチヒ大学

[その他の発表] (計 7 件)

- ① Kaneko, Makoto « Determiners and Classifiers », *29th European Summer School in Logic, Language and Information (ESSLLI 2017)*、*Workshop on Quantifiers and Determiners*、2017年7月17-21日、トゥルーズ大学 (採択)
- ② 金子真「三つのタイプの認識的不定表現」、第71回北大阪言語フォーラム (Forum for Linguistics Kita-Osaka) 2017年2月19日、箕面市中央生涯学習センター第1会議室
- ③ Kaneko, Makoto « Distributivity over epistemically dependent members - an analysis of bare coordination in French », *Workshop Co-Distributivity*、2016年2月11-12日、パリ CNRS

[図書] (計 1 件 : 1 章を執筆)

Kaneko, Makoto « Une analyse de la coordination des noms nus en français en termes de TOUT COORDONNÉ ». In E. Gautier, E. Havu & D. Van Raemdonck (dir.) *DéterminationS* (Series: GRAMM-R. Studies of French Linguistics vol. 30). Bruxelles: Peter Lang, pp. 69-83, 2016.

[その他]

ホームページ

<http://soran.cc.okayama-u.ac.jp/view?l=ja&u=64944e818061979974506e4da22f6611>

6. 研究組織

(1)研究代表者

金子 真 (KANEKO Makoto)

岡山大学大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号 : 00362947